



河合文化教育研究所

主任研究員 丹羽健夫

# 教育を 読む

1853年、ペリー来航により鎖国の夢を破られた江戸幕府は、近代海軍の必要を悟り、1855年長崎に海軍伝習所を創り、オランダ海軍に教育を委ねる。本書はその第二次教育班長であるカッテンディーケによる、1857年9月から1859年11月までの約2年間の滞日記録である。

著者は本書の中で、長崎を中心にした日本の自然の美しさをいたるところで賛美する。「春ともなれば三月、雨を浴びて早くも野山は一面に緑の毛氈もうせんを敷き詰めたようになる。…四月にもなれば、梨、梅、桃、李その他の果樹に花が咲き初める」

また、インフラ（社会資本）の整っていることにも触れ、江戸時代が民度の進んでいた時代であることを伝えている。「一般的に住民は強健のように見受けられ、衣服はすべて



## 『長崎海軍伝習所の日々』

ファン・カッテンディーケ 著  
水田 信利 訳  
平凡社  
定価 2,200円+税

内地産の生地ではあるが、皆良きものを纏いおり、また農業ならびに国内小売商業も発達している様子です。堤防、治水事業等、特に整っており、目の届くかぎり麦畠および稲田が連なっております」

そして民衆は個人的自由を享有しており、その生活は衣食住いずれも質素であるが、贅沢を望まなければ生活必需品は安く、一般的にすこぶる幸福に暮らしているようである。

娯楽についての記述もある。まず芝居である。特に婦人は芝居が好きで、血眼になって評判をする。また巡業の手品師や相撲の話も出るが、本書の筆者は、相撲など悪戯小僧の喧嘩であると切って捨てる。

お盆の燈籠流しの様子も登場するが、このくだりは幻想的で美しい。

「(お盆の)三日間は毎晩、祖先や新仏のお墓が美しい燈籠で飾られた。…銘々藁や芦でこしらえた小舟を海へ流しに行く。その時には長い行列が町々に続き、或る者は小幟や燈籠を、また或る者は火花さえ持っている。だから海上はその流し物で一面が埋められてしまう」

当時の人口についての記述も興味

深い。日本人全体が約四千万人。江戸が二百四十一万七千八百八十人、内訳は士族とその家族 一百万、他所より来た日本人 四十万、僧侶 四十万、尼僧 四万、町人 五十七万二千八百八十、登録済み芸娼妓 五千。そうか江戸の人口は現在の東京の十分の一以下だったのだ。大阪の当時の人口総数八十万とも記述されている。

ただしこの国で怖ろしいのは地震である。1856年（安政3年）に江戸を襲った大地震による犠牲者は十万人にのぼったという。また地震には大火が付き物で跡形もなく焼きつくしてしまう、とある。この国は昔からねえ。

いずれにせよ、江戸時代末期の日本を実感させてくれる格好の一書である。

ただし、オランダ海軍による長崎海軍伝習所は、勝海舟、榎本武揚、五代友厚などを育て、文字通り大日本帝国海軍の揺籃の地となるのだが、皮肉なことに第二次世界大戦のスラバヤ沖海戦等で、オランダ海軍の主力はその日本海軍の攻撃で、壊滅する。